

第3回 十和地域まちづくり推進協議会 会議録要旨

【日 時】 令和4年5月17日（火）午後7時00分～9時00分

【出席者】 松下敦委員、中平光高委員、中平良子委員、伊賀守委員、田頭誠志委員、鈴木幸代委員、村井洋平委員、栗原あゆみ委員

【行政側】 山脇教育長、浜田教育次長、富田地域振興局長、畦地町民生活課長、岡学校教育課長、大元政策監、大河原文化的施設整備推進室長、東学校教育課副課長、吉川町民生活課副課長、上川地域振興課副課長、都築地域振興課係長、萩原町民生活課主査、西尾文化的施設整備推進室次長、河原まちづくり推進室主任、松下文化的施設整備推進室主任、西内地域振興課主任

【傍聴人】 1名

【議事及び質疑応答】

1. 開会

2. あいさつ

富田十和地域振興局長

3. 議事

- (1) 四十万十和地域における今後の小中学校の在り方について
萩原町民生活課主査より資料について説明

(田頭誠志会長)

具体的に十和地区の小中学校について、今出されている統合案についての課題や利点を話し合っていたきたい。今回課題が4つ出ているが、教育委員会の事務局としては、どれが大きな課題と感じているのか。

(浜田教育次長)

小学校の統合についてと、建て替えについてはセットで考える。学校の種別についても、今いろいろな動きがでてきている。それらも含めて検討していくべき。学校名については変えたいという意見があれば、一番早く解決できる。変えるのであれば、統合の時（建て替えの時）がタイミングとしてはいいのではないかと考えているので、4つの課題を総合的に考えていただきたい。

学校種別についてはまだ白紙である。

(田頭誠志会長)

学校名については、以前も中学校統合の際、議論した。しかし、結果としては十川の保護者を中心に、十川を残すということで決まった。

(鈴木幸代委員)

子どもが昭和小学校に所属している。職場も昭和。

適正配置計画の話聞くたびに疑問がわきあがってくる。

学校というのは、同年代のものが集い学び遊び、その学校があることで、関係する人の出入りがあり、地域にとってすごく大事な存在である。小中学校は生徒数によって適正な人数が決まっている。高校は、一生懸命地域に残そうと頑張っている。それらの働きかけの違いとはなんでしょうか。

(田頭誠志会長)

保小中高とも、初めに統合ありき、適正数ありきでもない。現状適正数に大きく満たないから統合の

計画を進めざるをえない。

(山脇教育長)

小中学校と高校の違いは、まずは設置者が違う。小中学校は適正配置計画、高校は振興計画。高校については、地元の生徒の母数がある。20人いればクリアできる。そこを地元の地域愛を含めた、高校までしっかり教育をしていこうということと、高校の学び、地域の活性化に繋げていこうと、高校は応援している。卒業する中学生が一定数いれば、県の線引きをクリアすることが可能。小中学校は母数が決まっている。

(鈴木幸代委員)

昭和中学校がなくなって、人がいなくなって寂しくなったという話をよく聞く。町全体として見たときに、学校がなくなるというのは、指を切り、手を切り、足を切り、自分の体を切り落としていくことだと感じる。

(山脇教育長)

四万十町は統合を繰り返してきた。一定数の人数のもと、望ましい計画を、適正配置計画として取り上げたが、時代の流れを含め、地域の声も聞いていく中で、方針として令和6年4月を令和7年4月以降という方針に切り替えた。四万十町は中学校も3校となった。中学校を基準として小中の連携を深めていこうという方針にしている。児童がいる限り学校を残していこうという方針に切り替わるのか最終的にはまだわからないが、この計画では、望ましい環境づくりに向けて、1学年10人規模での学校規模として、子どもたちの必要な力をより育める環境を作っていこうという計画なので、すぐに答えは出ないかもしれない。四万十町は広いので、先に統合する学校もでてくると思う。昭和と十川がどうなるのかについては、まだ十分議論の余地はある。

(田頭誠志会長)

統合ありきで進んでいる計画ではない。

現状、児童生徒数が激減している。そういう中で、一人二人、三人四人の学校が維持できるのか、ということも考えていかないといけない。当然統合すると、学校がなくなった地域は活気が失われる。なぜかという、通学する子どもが減るから。それで子どもたちの学びが確保できるのかどうか。地域の為に小さい学校を残すのか、それとも、小さい学校だからより良い学びができるのか、どういう視点で考えるのかということも、非常に大事なことではないかと思う。

(伊賀守委員)

小学校の統合問題で、以前、地域からお願いして統合をお願いしたことがある。(大道)
あまりにも子どもが少なくなると、競争もなく小学校中学校へと上がっていくようになる。中学校の問題としては、クラブがないからよその中学校へ行くという問題も出てくる。ある程度人数がいればその問題も解決できる。今後人数が少なくなると統合するのか、今の時点で地域で協議して進めていくのか。

(萩原町民生活課主査)

※資料に沿って、人数の説明

(伊賀守委員)

あまり小さくなりすぎるとPTAの活動がちゃんとできなくなる。
子どもに負担もかかってくるようになる。

(村井洋平委員)

質問だが、なぜ義務教育学校というのにしてるのか。

(田頭誠志会長)

6・3の枠組みにとらわれず、その枠組みをある程度自由に組める。
例えば義務教育の年間を、その学校に応じてデザインできるというメリットがある。

(山脇教育長)

地域の特色プラス、教育課程の特色。通常9年生までである。例えば小学5年6年中学1年を中学年とし、他を低学年、高学年としたときに、中学校の教員が専科として小学校5年6年に授業をする。小学校の高学年から専門性のある教育を受けられる。

(村井幸代委員)

結構移住者の中では、子どもの教育関係で住む街を選ぶ人もいる。そういうことを考えると、小中の建て替え時のキャパシティも余裕があったほうがよいのでは。文化的施設を十和にもつくろうとなったら、学校も一緒に考えていけたら魅力的なものになるのではないか。令和7年からの統合を考えているのであれば、文化的施設とも関連してくるのでは。

(山脇教育長)

今の校舎の性能診断をしたうえで、改築というのも一つの案で、大規模改修的な長寿命化という計画もある。新しい校舎が建つというのは、今日の段階では答えられない。いま、60~70人いる規模で統合するのか、20~30人と小さくなって統合するのかという話にもなってくる。その中で、十川中と小学校の魅力付けをどのようにしていくのか、残念ながら十川中学校が、7・6・7の20人、昭和小学校の卒業生が大正中学校へ行ったりという事もあり、十川中の人数が少なくなっている。この先は一定、十川小、昭和小学校区にも切れ目なしに児童がいるのでその辺を含め議論をしていただきながら、教育委員会としては十川中学校の校舎の性能診断を含め、保護者、地域と話を進めていきたい。

(田頭誠志会長)

現時点の実態として、昭和小から十川中学校へ行く子どもが少ない。理由としては部活動。そのため十川中は、住んでる母数よりも少ないという実態となっている。制度としてルール違反をしているわけではない。そのこの学校めがけて生徒が集まる、魅力ある学校づくりをするというのはアイデアとしていいと思う。

(栗原あゆみ委員)

村井委員の魅力あるカリキュラムがあれば移住者が増えるのではないかとこの意見については、今後村井委員の家庭でも大きく関わってくるから、そういう意見もできるのかなと思う。知り合いの保護者達は、そういう意見をいう場がない。実際に、子どもを持つ保護者の意見について、どう吸い上げる予定なのか。

(浜田教育次長)

統合に対しての説明会については昨年度、対象校の保護者全員に対して行っている。(全員には来ていただけてはいないが)保護者側から要望があれば、そのお答えをする準備はできている。今は説明会をして1年もたっていないので、保護者のみなさんの動きを見せていただいている状況。

(栗原あゆみ委員)

その話し合いの機会というのは今後、具体的に予定されているのか。

(浜田教育次長)

機会があるごとに、昭和小の保護者会のなかで話し合っただけだったらよいということと、十川小の保護者会との話し合いの機会も持っただけだったらという投げかけはさせていただいている。

(鈴木幸代委員)

行政の方から、話し合いをしましょうという事はできないのか。

(田頭誠志会長)

教育委員会事務局が、話し合いをしましょうと言ってくるまで話し合いができないのは、かなりPTA自体が弱体化している現状ではないか。

(伊賀守委員)

自分たちは、地域、学校 PTA など各学校でやって、そこで話をまとめてから、教育委員会を呼んで話し合いをした。

(田頭誠志会長)

かつて、4校が1校になった。それも比較的スムーズになった。

それができたということが、今の伊賀委員の話した中にヒントがある。

現状なかなか進まない。教育委員会側が説明会を開催しても、全員参加しない。教育委員会側からやりましようと言われなければなかなか開けないのではないかとということも、本当に地域の学校を守るという事になっているのかどうか。そこまで地域が学校のことを考えているのか。というようなことも、きつい言い方をすればあるのではないか。

(伊賀守委員)

教育委員会へ話を持って行くまでも、段ボールいくつもの資料を作り、話し合いをした。

(松下敦委員)

先ほど大正中へ行っているという話があったが、十川小は嫌なので、大正小学校へ行くというパターンもあるのではないか。

(田頭誠志会長)

理由によるとは思うが。

教育というのは計画的に行うというのがとても大事だと思う。

(浜田教育次長)

大正中学校を選択する大きな理由は部活。部活は一定の人数がいないとできない。

仮に十川中の人数が増えたときに、全てがクリアできるとは思えないが(望む部活が全てできるとは思えないが)、部活の数を一定増やすことは可能ではないか。いまは、中学校に行く際に大正中学校を選択しているので、仮に昭和小と十川小が統合した場合には、大正中を選ぶ人は少なくなるのでは。

(田頭誠志会長)

つまり、昭和小と十川小がもし仮に統合した場合、そういうメリットもあるのではないかということですね。

— 休憩 —

(松下敦委員)

義務教育学校の制服とはどうなっているのか。

(浜田教育次長)

制服については、できるだけ保護者の要望に応えられる。いま、こうするというのはない。

(山脇教育長)

義務教育学校については、メリットもデメリットもある。

(田頭誠志会長)

デメリットの一つとして挙げられるのは、指導にあたる先生は小学校と中学校教諭の免許が必要であるということだろうか。

実際に高知県内でも、中学校の英語教諭が、小学校の教諭として配置されて、小学校の英語学習をしているという実態も出てきていると聞いている。

それを制度化していくのが小中一貫校であり、義務教育学校というふうになっていくと思われる。

(伊賀守委員)

現在、四万十町で、小学校と中学校の教員免許を持っている教員はいるのか。

(山脇教育長)

あまりいません。(中学校、高校はいますが)

(伊賀守委員)

せっかく地元で働いている先生が、そうなるとう働けなくなるのでは。

(中平良子委員)

学校統合の話に、保護者以外で地域の人も加われるのか。

(浜田教育次長)

当然地域の方にも話す機会を設けないといけないと思っている。

(田頭誠志会長)

令和7年4月以降の統合を進めていくのは、児童数の減少が一つの要因か。

(浜田教育次長)

適正配置計画については、申し訳ないが地域のことは抜きにして、子どもたちにとってどういう環境が一番学校としていいのかというのがあり定めた計画なので、その計画の基になっているのは児童数である。

(田頭誠志会長)

1学年10人、小学校全校で60人が適正な規模。それを下回るというのは少ないのではないかというのが、適正配置計画。

(栗原あゆみ委員)

小学校の教育カリキュラムについて、統合のタイミングではなく、今すぐ変えたりはできるのか。例えば、スポーツに特化した学校にしますなど。

(山脇教育長)

先日P連の総会でも話をさせていただいたが、学校運営に参画できる「学校運営協議会(コミュニティスクール)」の立ち上げをお願いしている。

学校の教育目標を、保護者・地域と共有して、それに向けてどういう運営、どういう指導があればいいか、それに携わる教員についても、どんな教員を呼んでもらいたいなど、意見を出せるようになる。そこを目指していきたい。そこで魅力ある学校とはということろで、何かに特化したものが一緒に考えられないのか、外部のアドバイザーなどを呼んで、段階を踏んでできればいいのでは。

(田頭誠志会長)

学校適正配置で、統合だけを進めているのではなく、今ある学校が特色ある、魅力ある学校になるような方法として、四万十町としては、コミュニティスクール(学校運営協議会)制度を推奨しているということか。

(山脇教育長)

導入していきたいということです。

(田頭誠志会長)

今、何校ぐらいやっているのか。

(岡学校教育課長)

米奥小学校と影野小学校の2校です。

(鈴木幸代委員)

初歩的な質問ですが、学校をどうしていこうかというような、地域の人が加わって会議をするというのは、どういう方が参加できるのか。

(田頭誠志会長)

コミュニティスクールについての説明を簡単をお願いしたい。

(岡学校教育長)

※コミュニティスクールについての説明

(浜田教育次長)

町長が、学校運営を考えるのにふさわしい方を地域内や保護者内から選んで組織していく。

(田頭誠志会長)

常に前向きにその学校について話しあう会が目的(目標)

コミュニティスクールについては、学校の教職員の配置について、教育委員会へ意見することができる。それが聞き入れられるかは別だが。それについても、地域の素材を生かした学びを進める人がほしいなど、前向きな意見ならいいが、この校長(先生)はよくないから飛ばしてほしいという事になっては、この制度そのものが失敗するのではないかと思う。

(山脇教育長)

この問題は、小学校の適正配置計画が課題になってきている。地域の将来を考える機会として、地域と一緒に話し合っていただきたい。この適正配置計画、学校運営協議会は子どもを中心とした計画。その周りの地域については、地域の大人が学校運営と合わせて、将来を見据えた枠組みを考えていただきたい。統合は絶対にしないという声が多ければ多いで、じゃあ何をやっていくのかを含め今後議論になっていくと思うので、引き続きよろしくをお願いしたい。

(田頭誠志会長)

統合するかしないかで、統合しないという事になった場合、今の学びをどうするのかという事も考えないといけない。それがないと、ただ単純に地域がさびれるから統合しない、それだけでは、いま暮らしている児童生徒を犠牲にする。児童生徒の学びの犠牲の上に地域を残そうとするのかという事になる。統合しないという選択をした場合、少なくなった人数で何ができるのか、当然教職員の配置数を増やすという事はできない。で、どうするのかというのは、統合しないという意見と合わせて考える必要がある。

(2) 文化的施設（図書館）十和分館について

大元政策監より資料にそって説明

(田頭誠志会長)

図書館、美術館の担当課はどこになるのか。

(大元政策監)

生涯学習課になる。

(田頭誠志会長)

旧小鳩保育所の「カリコレ」の動きについて説明をお願いしたい。

(栗原あゆみ委員)

入館者数は99名。

来場者はリピーターが多い。(1/3程度リピーター)

来ている地域は、十川が圧倒的に多いかと思っていたが、まんべんなく各地域からきている。

3歳から95歳の方まで利用してもらっている。

図書機能としては、大正図書館から団体貸出として毎月300冊借りている。その本については、「カリコレ」というクラウドシステムを活用している。大正図書館の貸出としては30冊ぐらいしている。

人によっては、一回返しに来て借りるという事をされている。

大正図書館の本が30冊と言ったのは、現状、地域の方からの寄付の本が集まってきており、それに関しては、大正図書館の「カリコレ」システムではなく、紙で管理している。その貸出も現状10冊ぐらいしている。

旧小鳩保育所としては、図書の機能だけではないので、学校帰りに宿題をしにきたり、休みの日に小さい子供を連れて遊ばせにきたり、雨の日に行くところがないのできたり、また、70代の方が本が好きでよく足を運んで来てくれている。

一番の目的としては、地域の方が主体性をもって、この場をどうしていくかを考えてもらう場所を提供している。すでに、地域の方から、壁の色塗りをしたいなど、こうした方がいいのではないかという意見も出ている。

課題としては、駐車場が遠いということと、手すりがないのでホールに上がるのがおっくうという高齢の方がいる。寄付の本が増えてきたので、その本の管理について。園庭の花の管理などの運用面の課題が出てきている。

(田頭誠志会長)

サテライト貸出の走りとして、旧小鳩保育所を使ってやっている。令和4年度は十和地域にある旧小鳩保育所でとなっているが、ここは十川地域なので、昭和地域などでもこういう「カリコレ」ができれば、十和地域としての試行的な動きになっていくのではないかと。昭和地域などで、そういう団体があればぜひ図書館などに連絡をすれば相談にのってくれるのではないかと。まずは、十和地域振興局町民生活課でもよい。

(鈴木幸代委員)

団体貸出とサテライト貸出は同じ意味か。

(大河原文化的施設準備推進室長)

団体貸出を使って、地域やそこを拠点として展開をしていただくという意味でサテライトという言い方をしている。団体貸出を受けるだけで、それらを読み聞かせをするなどはサテライトとは呼んでいない。その団体貸出で借りた本を、今回の旧小鳩保育所のように使っていただいて、地域やグループで展開することを、サテライト貸出という。団体貸出の、もう一個先だと、思ってもらえればいい。

(大元政策監)

団体貸出はあくまでも仕組み。制度として、そういった制度があるもの。それを使って、借りたところ、自分たちでその先へ貸出ができるというところをサテライトと呼んでいる。

(鈴木幸代委員)

「カリコレ」システムについても教えてほしい。

(大河原文化的施設準備室長)

クラウドのシステムを使っていて、簡単なアプリのようにになっている。旧小鳩保育所の場合は、図書館で借りている団体貸出の300冊分の本のデータがそのクラウド上にあり、その本に対して、貸出や返却がアプリの中でできるというイメージ。「カリコレ」というのは、商品名なので違う言葉でいうのは難しい。もともとは木星の周りをまわっている衛星の一つに「カリコレ」という星があり、それをシステムの開発者が見つけ、つけたものである。図書館という本体があり、衛星のように、別のグループがまた貸しをするという、そういう意味でのサテライトとして「カリコレ」という名前がつけられている。

(鈴木幸代委員)

アプリが使える人じゃないと、このシステムは使えないのか。

(大河原文化的施設準備室長)

システムは図書館側(町)が契約しているので、IDやパスワードを渡して使っていただくという形になる。

「カリコレ」を使う現場の方では、Wi-Fi環境やそれを使う端末が必要となってくる。端末については、タブレットでも利用できる。

(田頭誠志会長)

合法的な本のまた貸し制度を、より簡単に行うためのツールが「カリコレ」というアプリである。それは図書館の方が準備しているが、まだ貸し出せる余裕はあるのか。

(大河原文化的施設準備室長)

あと4アカウントある。

(鈴木幸代委員)

自分でもやってみたいという思いがある。

あったかふれあいセンターでも団体貸出はしている。大正図書館では記録をもって帰れないので返し忘れがある。「カリコレ」システムだったら何かカードがあるのか。

(大河原文化的施設準備室長)

そういったものはなく、貸出をしているサテライトで、例えばしおりのようなもので、〇〇返却などというやり方しか現状ではない。「カリコレ」のシステム自体も管理者側で使うシステムとなっているので、借りる側が自由に見れるようにはしていないので、そこの部分の解決にはならない。

(西尾文化的施設準備次長)

サテライトでは、必ずしもシステムを使わなければいけないというわけではない。あくまでも、貸し出す方を支援するシステムなので、やり方については、貸し出す側の選択次第となってくる。

(大元政策監)

旧小鳩保育所へ来られる方の移動手段については聞いているか。

移動図書館を今年整備し、来年から走らせる計画としているが、そのルートについて、地域へ行くのか、事業所や学校など目的によって行くのかはいろいろと考えなくてはいけない。旧小鳩保育所で展開することによって、十和地域全体のみなさんが来れるような状況にあるのか、移動手段に困られているのか、ニーズの把握をしてもらえないか。この試行的な3年間の中で研究しながら移動図書館のルートに結び付けていきたい。

(田頭誠志会長)

今後サテライトとして、こういった地域にアプローチできていないというものがあれば、そこを補強しようかといった形で移動図書館のルートも考えていける。

昭和でもこういった拠点があれば、より十和地域全体でできる感じになる。

(栗原あゆみ委員)

いまは、全員に名前、年代、地域、電話番号を書いてもらっている。(リピーターは名前だけ)

文化的施設について、思うことがあれば意見をくださいというアンケートもつけているが、そこに意見する人は今のところ0人。移動手段について困ったことはありますか、など、必要であればそのアンケートに入れることもできるが、そういう必要性はあるのか、それとも口頭できいた情報でよいのか。

(大元政策監)

いま、移動図書館のニーズについて問われている。それについてのデータがほしいので協議をさせていただきたい。

(伊賀守委員)

出てこれる人は、足があって話が聞けるが、出てこれない人の意見の吸い上げはどうするのか。(各区分長に聞くのか)

(田頭誠志会長)

実際、移動図書館が動き出すのはいつなのか。

(大河原文化的施設準備室長)

今年度購入で、来年度からという予定。

(田頭誠志会長)

今日は統合の話が長引いたが、文化的施設についても継続的に話し合うという予定になっている。次回の会までに、この会で話し合いたいテーマがある委員さんは出してほしい。

— 終了 —